

曼荼羅 (maṇḍala)

理解の一助に

— 備 忘 ノ ー ト —

里 見 泰 穩

I

本尊論資料に、日朝口伝 覚林坊日恆（覚林房二世・永正6年8月朔日化・寿54才）の筆写として次の如くある。

○法華曼荼羅八葉九尊并陀羅尼
又云八葉十尊事日朝、日恆尋申云十尊者如何、
仰云釈迦多宝迄十尊也故ニ八葉十尊云

無量寿決定如来を首題ニスル意ト覚タリ

とあり、次いて観智儀軌を引き無量寿決定如来の真言をかかげ、これに二三の意見が付されている。此れを詳しくするために、覚禪（1143～1212A・D、嵯峨清凉寺の学匠、字は金胎房少納言阿闍梨 嵯峨阿闍梨）の覚禪鈔及び、承澄（1205～1282A・D 台密の学匠、極楽房、小川の僧正）の阿娑縛抄を見る。

法華に関するものとしては、

覚禪鈔には、「法華法」「法華法諸流」「法華秘決」があり、阿娑縛抄には「法華法」「法華法日記」があり、又「無量寿決定如来」がある。覚禪鈔の「法華法」冒頭には、此の法は延命・滅罪・増益・息災のために修する由の記がある。阿娑縛抄の「法華法」にも、「滅罪生善頓証菩提の為之を修す可し」とある。覚禪鈔・阿娑縛抄は共に事相を述べたものである。

従って修法に要する用意を細かく述べている。阿婆縛抄の「法華法」の始めに述べているのを見ると、幡24流（長3尺、赤黄）を始めとして、五宝・五菜・五香・五穀・壇供米・御灯・壇敷布二端等を用意し、護摩壇所等について記し、修僧についても、阿闍梨・伴僧・承仕・駆使・見丁等について規定を述べている。かくて本尊・曼荼羅を定めて、これに対して唱える真言について記すというのが大体の主意であり、それらについての諸説口伝を集大成したものである。

覚禪抄の「法華法」には、先づ釈迦文常に靈鷲山に在って三乗衆の為に常に法華を説くと深く信じて無量寿決定如来の真言を誦して、一切有情如来寿命を獲んと願うべき由を述べてその真言をあげているのでその真言を試訳してサンスクリット文法に合わせて見たい。覚禪鈔「法華法諸流」には、「薬王菩薩」「勇施菩薩」「毘沙門天王」「持国天王」「十羅刹女」「普賢菩薩」等の陀羅尼があげられ、これに続いて、法華肝心真言があげられている。「法華肝心真言」は開目抄にも引かれている。この真言には、訳が注記されているが、これも一応「無量寿決定如来の真言」と同様に、できるだけ文法に合わせて手控を作っておきたい。覚禪鈔の「法華法諸流」に於ける、薬王菩薩・勇施菩薩・毘沙門天王・持国天王・十羅刹女・普賢菩薩等の陀羅尼呪については「法華文化研究第4号」所収の「法華経陀羅尼呪覚書（塚本啓祥）」に梵文諸本・漢訳の諸異訳・西藏本の克明な対照がなされている。

以下、覚禪鈔「法華法」の「無量寿決定如来真言」覚禪鈔「法華法諸流」の「法華肝心真言」及び「法華法諸流」の画像の曼荼羅・種子曼荼羅の法華曼荼羅をとり、その註記手控を作っておきたい。

参考 amitābha

amitāyu(s)

amitaprabha

amitanātha

amitāyurjñanaviniścayarājendra

(Mmk. 301.15 ; 303.23 ; 426,8 by F. Edgerton Buddhist
Hybrid samskrit grammar dictionary)

Mmk= (ārya-) mañjuśrīmūlakalpa, ed. gaṇapati Śāstri

ज्ञानं चित्तं 智 識 二合 彙

jñāna

knowledge, wisdom, intention, organ of sense,

निश्चयः च 尾 頰 室 者 二合 也

viniścaya

decision, settling, fixing,

参考 viniścī, to determine, resolve,

ascertain,

राजसुन्दरः च 羅 逝 引 捺 羅 二合 也

rājendraya

rāja + indra + ya

rāja *m.* prince, king, chief of,
indra *m.* chief of the Vedic gods, chief, prince of,
indrāya (denominative) (Ā) long for Indra,

参考 indrayu *a.* longing for Indra

indriya *a.* belonging to Indra, dear to Indra

m. companion of Indra,

n. Indra's might, organ of sense,

𑖀𑖄𑖁𑖀𑖄𑖀𑖄𑖀𑖄 但他引藥路引也

tathāgatāya (dative case) 如来に。

tathāgata *p. p.* faring or behaving thus,

so conditioned, such,

m. a Buddha ; a Buddhist,

namo aparimitāyu jñana viniścaya

rajendraya tathāgatāya

無量寿智慧決定王如来に帰命し奉る。

𑖀𑖄 唵

om, the secret word, 𑖀𑖄𑖀 (namaḥ, namas, namo) と同義に用いられる。

法身・報身・応身の三身に配することもある。密教の代表句。唵字観がある。

a word of solemn affirmation and respectful assent, sometimes translated by 'yes, verily, so be it' and in this sense

compared with amen ;

it is placed at the commencement of most Hindū works, and as a sacred exclamation may be uttered [but not so as to be heard by ears profane] at the beginning and end of a reading of the Vedas or previously to any prayer ;

it is also regarded as a particle of auspicious salutation [Ha-il /] ;

om appears first in the Upanishads as a mystic monosyllable, and is there set forth as the object of profound religious meditation, the highest spiritual efficacy being attributed not only to the whole word but also to the three sounds a, u, m, of which it consists ; in later times om is the mystic name for the Hindū triad and represents the union of the three gods, viz. a (Vishṇu), u (Siva), m (Brahmā), (a Sanskrit-English Dictionary by sir monier monier-williams) より抄出,

サレキキテ 薩摩僧去塞迦 引 囉

sarvasuskāra (総てよく正しく為された)

sarva+su+skāra

sarva *a.* entire, whole, all, every,

su *ad.* good, well, indeed, right, very,

suskāra を sukāra と見る

sukara *a.* easily done,

参考 su-krit *a.* doing good, benevolent, righteous,

su-kṛita *n.* good deed, meritorious act, righteousness,

virtue, moral merit, *śukāra*, *śukāra*,
su-kṛita *p. p.* well done, made, executed; well-formed,
adorned, fine,

kṛi は upa, pari, sam, の後に skṛi となる。

覺禪鈔の𑖀𑖩𑖪𑖫 suskāra に対し、阿娑縛抄無量壽命決定如来(阿
娑縛抄第52・大日本仏教全書阿娑縛抄第二)

には𑖀𑖩𑖪𑖫 seskāra とある。

𑖀𑖩𑖪𑖫 跋哩隸𑖫 𑖀は阿娑縛抄の無量壽命決定如来にある真言に
より𑖀 (ddha) と改めた。

pariśuddhā *sg. nomi.* (完全情浄と訳す)

pariśuddhi *f.* complete, purification, exoneration

参考 sakhi (友) *m.*

sakhā *sg. nomi.*

i 又は u にて終る形容詞は為、從、属、依の単及び属・依の兩に於て
は此の中姓の語尾の外此に相当せる 男性の格の語尾を用いることを得
(荻原、実習梵語学60条)

𑖀𑖩 達磨 𑖀𑖩

dharma *m.* established order, usage, institution, custom, rule,
duty, virtue, moral merit, goodworks, right, justice,
law,

𑖀𑖩 帝 彼, 其,

te tad の neuter, dual, nominative, accusative, vocative,

masculine, plural, nomi. voca. feminine, dual,
nomi. accus. voca. ;

महा नया म्हा नया 摩賀引義也

mahā naya

mahā

naya *m.* leading, conduct,

mahā-naya を vocative に見て偉大な導師よと訳す。

参考

mahā-nāyaka, great leader or chief, large central gem in a
pearl necklace,

परिवारे परिवारे 跋哩囉引餘引

parivāre

parivāra *m.* cover, attendants, train, retinue, 侍者よ, 隨行者よ
と訳せる。parivārā *f.* と見ると parivare は vocative と見られる。

स्वाहा स्वाहा 娑哈引賀引

svāhā (indeclinable)

hail, hail to, may a blessing rest on,

(with dative, an exclamation used in making oblation to the
gods)

su and vah dur-āhā と比較,

ah, to say, to speak, to express, to call,

成就・吉祥などと訳す。真言の後につく常用語。

om sarva suskāra parisuddhā dharma te mahā nāya parivare
svāhā

帰命す。一切善にして完全清浄なる法よ、彼の偉大なる導師よ。その
従随者よ。成就吉祥
と試訳しておく。

此の無量寿決定如来とは多宝如来であるとか、釈迦報身であるとか、又
釈迦法身であるとか阿弥陀であるとか、いろいろの諸説があることを覚禪
鈔「法華法」に記されている。これも注意しておくべきことだと思ふ。

又阿婆縛抄「無量寿命決定如来」（大日本仏教全書阿婆縛抄第二）のな
かで、第七行法用意の事と題して次の如く述べている。

第七行法用意事

禪定僧都法華次第奥云。問。無量寿命決定如来法。即是法華法歟。答。
有云。不然。彼如来真言。在此軌序分。故非法華法正宗。問。若爾。依
何修彼法。答。亦可任行者意樂也。云々

この註記もいろいろの点で考うべきものをもっていると思ふ。

III

次に法華経肝心真言をあげ（覚禪鈔・法華法諸流・大日本仏教全書覚
禪鈔第二）多少の研討をしておきたい。二種の伝承があげられているの
でそのまま掲げる。

◦法花肝心真言

𑖀𑖡𑖛𑖛𑖛𑖛𑖛𑖛𑖛 𑖀 𑖀 𑖀 𑖀 𑖀 𑖀 𑖀 𑖀 𑖀
 囊莫三曼多勃馱南掃命仏陀耶 唵 三身如来 阿 闍 阿 示 引 暗 悟 惡 入 薩縛 勃 馱 一切仏也
 𑖀 𑖀 𑖀 𑖀 𑖀 𑖀 𑖀 𑖀 𑖀 𑖀 𑖀 𑖀 𑖀 𑖀 𑖀 𑖀
 枳擯二合囊知也娑乞藪二合毘耶見也識々囊娑縛如虚空性羅乞叉僂離障相也 薩
 𑖀𑖛 𑖀𑖛𑖛𑖛𑖛𑖛 𑖀 𑖀 𑖀 𑖀 𑖀 𑖀 𑖀 𑖀
 達摩正法也浮陀里迦白蓮花也薩馱覽經也惹入也吽迴也鑊住也斛歡喜也縛日羅堅固
 𑖀𑖛 𑖀𑖛 𑖀 𑖀
 羅乞叉舍 禪讓也吽空無相無願也娑縛詞 決定也。小野真言集用之。

◦同極秘密真言

延懷云。善無畏付金剛智。〰 〰 付不空。〰 〰 付一行阿闍梨。云。

伝集三云。付法如前。此真言誦畢為法花經一部誦已了。

𑖀 𑖀 𑖀 𑖀 𑖀 𑖀 𑖀 𑖀 𑖀 𑖀
 囊莫三曼多没馱南掃命三身 阿 闍 阿 示 引 暗 悟 惡 入 薩縛 二合没馱仏 枳耶 二合
 𑖀 𑖀 𑖀 𑖀 𑖀 𑖀 𑖀 𑖀 𑖀 𑖀 𑖀 𑖀 𑖀 𑖀 𑖀 𑖀 𑖀
 囊智作乞藪 二合尾耶二合 知見識々囊羅乞叉僂相 薩哩 妙達摩法浮陀里迦白
 𑖀 𑖀 𑖀 𑖀 𑖀 𑖀
 蓮花薩陀覽經惹入吽迴鑊住斛歡喜娑縛二合賀引

已上兩本。花藏院集用之。

延懷云。法花肝心真言結八葉印。廻轉心上頂散之。伝教大師口決。伝受露地和尚。云。

namo samata buddhāmaṃ om

a (𑖀) ā (𑖀) am (𑖀) aḥ (𑖀)

sarva buddha jñana sakṣubya gagana sarva raksani saddharma
pundharika sutraṃ

jaḥ hūm baṁ hoḥ vajra raksamām hūm svāhā

𑖦𑖜 𑖩𑖜 𑖩𑖜

namo namas, namaḥ 南無 (前出)

namas は genitive accusative, dative を伴う。indeclinable.

動詞 √nam,

𑖦𑖜𑖜𑖜 三曼多

samata は samanta (𑖦𑖜𑖜𑖜) か?

samanta *a.* universal, complete, entire,

samata は same, 等しき

samatā *f.* sameness of level, equality, identity, (with instr. gen. or comp.)

𑖦𑖜𑖜𑖜𑖜 𑖩𑖜𑖜𑖜 𑖩𑖜𑖜𑖜 𑖩𑖜𑖜𑖜

buddhānām *g.* (属格) 仏陀

namo に対して属格となっている。

𑖩𑖜 唵

om namah と同義に用いられる。

法・報・応三身を表わすこともある。前出。

𑖦𑖜𑖜𑖜𑖜𑖜 𑖦𑖜𑖜𑖜𑖜𑖜 𑖦𑖜𑖜𑖜𑖜𑖜 𑖦𑖜𑖜𑖜𑖜𑖜 𑖦𑖜𑖜𑖜𑖜𑖜 𑖦𑖜𑖜𑖜𑖜𑖜

a, ā, am aḥ,

開示悟入に配する。その理由は後記する。

サバ 薩縛

sarva *a.* entire, whole, all, every

ブツ 勃駄

buddhā buddhāḥ (*plu. uomi.*) と見るべきか。

ジイ 枳嶺巖 知と訳が付されている。

jñāna (*neuter*) knowledge, true or superior knowledge, wisdom,
intention, consciousness,

サセウ 娑乞鞠毘耶

sakṣavyi, or sakṣavyi 見と訳が付されている。

sāksh *cl.* I P. (sakshati)

sāksha, having eyes, sa-aksha

akṣi (*neuter*, 眼) の単・依は akṣaṇi 或は akṣiṇi は akṣiṇi 体・業
・呼の両数

sākshāt は *abl.* of sāksha

with the eyes, with one's own eyes,
evidently, clearly,

sākshin *mfn* seeing with the eyes,
observing, witnessing,

sakshya *mfn* visible to,
evidence, attestation,

サセウ sakṣabhya と見れば

saksabhyah は plural, dative, or ablative case と見得る。そうすれば、namo と応じて dative case と見ることでもある。覚禪鈔の「法華法秘決」は sakṣobhya 𑖀𑖩𑖛𑖚𑖩𑖛𑖙 となっている。

𑖀𑖩𑖛𑖛 𑖩𑖛𑖛𑖛

gagana (or gagana) *m.* the sky, atmosphere,
性、如虚空性と訳が付されている。

𑖀𑖩𑖛 𑖩𑖛𑖛𑖛

sarva (これは無い方がよいであろう。)

𑖀𑖩𑖛𑖛 𑖩𑖛𑖛𑖛𑖛𑖛 𑖩𑖛𑖛𑖛𑖛𑖛𑖛 𑖩𑖛𑖛𑖛𑖛𑖛𑖛𑖛

rakṣani lakṣana と見得るか?

lakṣana *a.* indicating, expressing,
n. mark, sign,

rakṣani 𑖀𑖩𑖛𑖛𑖛𑖛 𑖩𑖛𑖛𑖛𑖛𑖛𑖛𑖛 𑖩𑖛𑖛𑖛𑖛𑖛𑖛𑖛 と訳がつけられているが、これは rakṣani を ra と kṣani とに分割して考えたのではないか。ra を rajas (dust, grain of dust, pollen of flowers,) と見 kṣani を動詞 kṣan (hurt, wound, break) から来たと見て離塵と解したのではないかと想像される。

参考

rajas *n.*

1. sky, air, atmosphere,
2. dust, grain of dust, pollen of flowers,

raja *m.* dust, pollen of flowers,

raj, rañj IV rajya.

be coloured, grow or be red, be excited, be charmed, be delighted by,

be excited, be charmed, be delighted by,

be glad,

kṣaṇ (क्षण) or kṣan (क्षन) hurt, wound, break,

v. VIII P. kṣan-o, -u, hurt, wound, break,

hurt, wound, break,

kṣata *p. p.* √kṣan, hurt, wound,

kṣati *f.* injury, loss, harm, damage, destruction,

kṣana *m.* killing,

kṣaṇana *n.* hurting, injuring,

kṣaṇ を男性名詞と見て kṣani を locative と見得るか？

gagana rakṣani を敢えて gagana lakṣaṇa と見て gagana laksane と locative に見て「虚空の相に於ける」と解すれば、法華経虚空会を表わすとも考えられるが、これは伝統に反するだろう。「性」と「相」と解すれば、十如を想起するが、次前の四種阿字が所謂迹門広開三顯一の文に相当するに對し、これは略開三に當る。

gagana rakṣani 小野真言集用之

gagana rakṣani は「小野真言集用之」としてあげられている法華肝心真言は

gagana sarva rakṣani (𑖔𑖔𑖔𑖔𑖔𑖔 𑖔𑖔𑖔𑖔, 誚々曇娑縛 羅乞叉偈) とあり、「花藏院集用之」としてあげられているものには

gagana rakṣani とあり、覚禅鈔の「法華法秘決」では gagana svā rakṣani (𑖔𑖔𑖔𑖔𑖔𑖔 𑖔𑖔𑖔𑖔) となっているが漢字の音表では「誚々曇羅乞叉

備」となって svā に当る音は無い。

𑖀𑖄𑖅 薩達摩

sadharma これは当然 saddharma (𑖀𑖄𑖅) とあるべきだろう。正法と訳が付されている。

𑖄𑖄𑖄𑖀 浮陀里迦

pudharika は puṇḍarika

白蓮華と訳が付されている。

𑖀𑖄 薩駄覽 經

sūtram sūtra athread, yarn,
string, line,
sūtram, *neuter nomi. acc.*

𑖀𑖄 惹

jah ja は生, ḥ は涅槃点, 衆生を法界に入らしむる義
金剛鉤菩薩の種子, 鉤召の義

𑖀𑖄 𑖀

hūm, ha は因縁, ū は三昧, m は空点

一切衆生を涅槃に入らしむ。菩提心の義, 恐怖の義,
金剛索菩薩の種子, 引入の義, 遍の訳が付してある。

𑖀𑖄 鑊

baṁ, ba 縛, m 大空 大空法界道場に縛住する義
留止の義, 縛住ノ義, 金剛鎖菩薩の種子,
能縛の義, √bandh 縛する, 繋ぐ
bandhana (*neuter, noun*) 縛繋, 繩の ban (baṁ)
無縛の義 (ba は縛, m は大空として)

𑖀𑖩 解

hoḥ 歡喜の義, ha 歡喜, 不生不滅の寂靜涅槃に入って真の歡喜に入る
ので ḥ (涅槃点) がある°

𑖀𑖩 縛日羅

vajra *m. n.* thunderbolt, adamant, diamond, mythical weapon,
金剛, 堅固ノ訳が付してある。

𑖀𑖩𑖩 羅乞叉輪

rakṣamām 擁護の訳が付してある。

√rakṣ rakṣa guard, protect, watch, take care of, spare,
preserve, keep, save,

rakṣa *a.* guarding, protecting, preserving, keeping,

rakṣā *f.* protection, preservation,

rakṣika *m.* guard, watchman,

rakṣikā *f.* female guard or watcher,

rakṣaṇam protectng, guarding, watching,

擁護とだけ註してあるのを尊重すれば rakṣamām を rakṣaṇam と解し
たものか。

又 √rakṣ (羅乞叉 𑖀𑖔) と mām (𑖀𑖔𑖔) に分け、rakṣ を一類動詞とみると rakṣa は命令法単数、二人称とみる。mām は一人称代名詞単数 mad の業格と見れば、rakṣa mām は「われを守護し給え」となる。此の方が文法に合っている。

𑖀𑖔𑖔

hūm 空・無相・無願の三解脱門の訳が付してある

𑖀𑖔𑖔 娑縛訶

svāhā sv-āhā (indeclinable)

(prob. fr. 5. su and √ah ; cf. dur-āhā)

hail, hail to, may a blessing rest on.

(with dative, an exclamation used in making oblations to the gods ;)

ah, to say, to speak, to express, to call (by name),

成就吉祥 決定と訳される。

svāhā を su-adhā と見て、「善く置くもの」、「火中に供物を善く整え置く神」を意味し火中に供物を捧げて呼びかける時の火神 (agni) の異称 (梶尾祥雲 曼荼羅乃研究より)。

adhā, to place on, put down, deposit, put,

四種阿字を開示悟入に配する理由については、次の「四種阿字配開示悟入事」を「阿娑縛抄」から引いておく。

(阿娑縛抄第百八十七教相雜抄上 [大日本仏教全書阿娑縛抄第七])

四種阿字配開示悟入事。

義釈云。以_レ阿字門故。一切衆生本有_レ仏知^{考知_作智}見性。如来以種々因縁為彼淨除眼膜使開明。故法華第一句云。開仏知見。使得清淨。即是淨菩提心也。既得淨菩提心。当広示法界藏中種々不思議境界。令普現一切善知識。遍學一切諸度門。故法華第二句云。示仏知見。即長_レ阿_引字。大悲万行義也^〇。已具大悲万行。次以娑羅樹王花開敷智。成大菩提。故法華第三句云。悟仏知見。即是_レ暗字義也。既成仏已。即以加持方便普門垂迹導利衆生。若衆生了知常住時。如来衆迹都尽。以无迹故。名為入般涅槃。故法華第四句云。入仏知見。即是_レ變惡字門也。字輪対如来方便智。更有第五長声_引恐惡_引字門。以無別体故。此中不説。^文

Ⅳ

大壇を設け曼荼羅をかけ、本尊を定めて真言を唱えるわけであるが、その曼荼羅に勧請する諸尊の形像について覚禅鈔の「法華法」には次のように述べている。勿論これは尊容鈔 阿娑縛抄 曼荼羅集等と共に観智儀軌威儀形色経の流れをくむものである。この儀軌形色経は法華経宝塔品の意を中心にしたものである。その間の配置・儀相等に多少の異りはあるが今は覚禅鈔を出す。

曼荼羅事

観智軌云。其壇三重。当中内院画八葉蓮花。於花胎上置_レ摩訶婆塔。於其塔中画_レ釈迦多宝同座而坐。塔門西開。於八葉上從東北隅為首。右旋布列安八大菩薩。初弥勒。次文殊。藥王。妙音。常精進。无尽意。観音。普賢菩薩。中院四隅初東北置_レ摩訶迦葉。東南須菩提。西南舍利弗。西北大目犍連。次於第二院東門置_レ鰲菩薩。南門鈴菩薩。塔前^{門イ}〇鈎菩薩。北門索菩薩。東門北得大勢。門南置_レ宝手菩薩。南門東宝幢菩薩。西星宿王菩薩。西門南宝月菩薩。北

満月菩薩。北門西勇施菩薩。東置一切儀考撰成就菩薩。東北隅花菩薩。東南
灯菩薩。西南塗香菩薩。西北焼香菩薩。次於第三院東門持国天王。南門毘樓
勒叉天。西門毘樓轉叉。北門置毘沙門天王。東門北大梵天。南天考長高供帝
釈。南門東大自在。西難陀龍王。西門南妙法緊那羅王。北樂音乾闥婆王。北
門西羅睺阿修羅王。東置如意迦樓羅王。東北聖烏菟沙摩金剛イ○東南聖軍荼利。
西南聖不動尊。西北置聖降三世金剛。於壇四面画飲飯イ食界道云。

更に覚禪鈔の「法華法諸流」では、諸尊像の形像儀相を詳しく述べてい
る。更に、画像で現わされた大曼陀羅とも称すべき法華曼荼羅、及び諸尊
をその梵字種子で現わした法曼荼羅（種子曼荼羅）が付されていて一目瞭
然であるので次頁にかかげる。

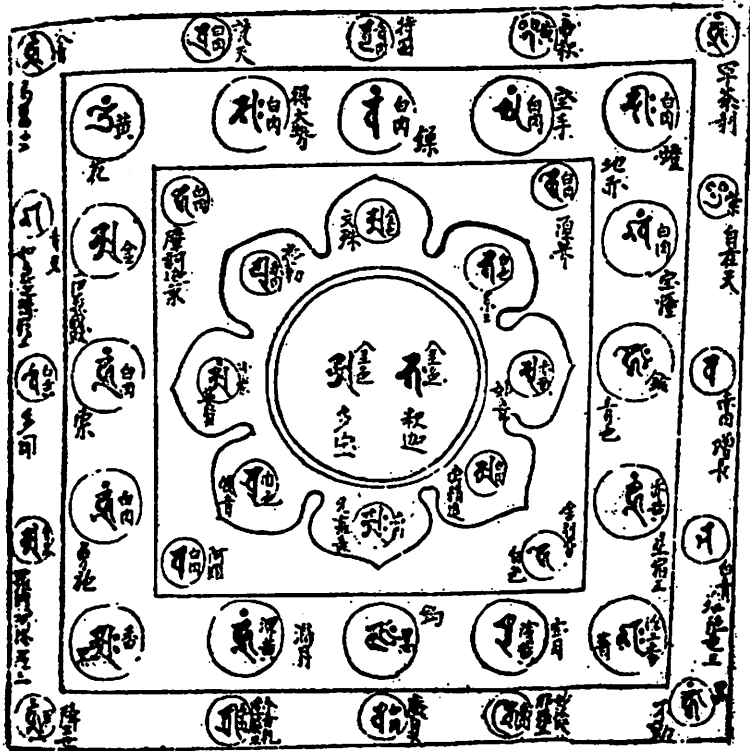
阿婆縛抄の「法華法」にも絵像と種子の曼荼羅がある。図像に見るよう
に法華曼荼羅は内院と第二院。第三院の三重からなり、内院は八葉蓮華を
画がき花台上に 都波塔を置き塔内に釈迦牟尼如来・多宝如来同座し、塔
門は西に開き、八葉蓮華上には東北隅よりの弥勒菩薩を首とし文殊・薬王
と右旋布列して八大菩薩を安置する。第二院では金剛樂菩薩を始め、十六
の菩薩、第三院には持国天王以下龍王、明王等の十六尊を安置している。

内院の塔中の二仏同坐の左右について、阿婆縛抄の「法華法」では二通
りを挙げている。

(1)には釈迦は右、多宝は左

(2)には釈迦は左、多宝は右

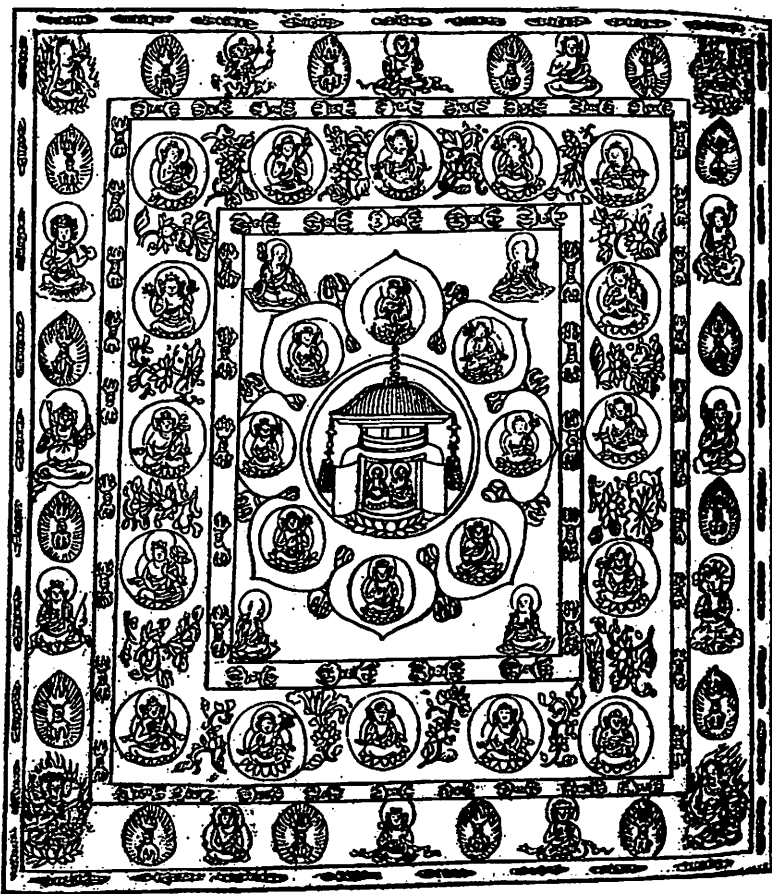
(1)の形は、多宝は禪定に入るが如しで尊である故に左であり釈迦は説法主
であり智であるので右であると云う。両手のうち左の手は定であり、右の
手は慧であると云うに應ずるのであろう。



(2)の形は、多宝は、もとより塔中に在ったのであり、釈迦は後から塔に入
 って坐すのであるから、云わば客人であるから左に坐せしめるとい
 である。世間でも左を以って上臨とするのでこれに准じて、饗応の意味で釈
 迦が左に坐すという。

又この釈迦・多宝は両部の大日を表はすという。釈迦は胎藏界の大日、
 多宝は金剛界の大日を表わすともいう。二仏竝坐の宝塔の全体を大日と考
 える思想があるからであろう。

阿婆縛抄「法華法」には「法華古本曼荼羅。塔中一仏。法界定印也。一
 仏智拳印有之。此以兩界当法華經本迹二門意也」とも言っている。



法華曼荼羅の中台は胎藏界であり、第二院、第三院は金剛界だと言われるが、この中台内院の八葉蓮華上の菩薩が何故選ばれたか、又内院の四偶に四大声聞が何故配せられているかについての解説は興味のあることである。

八葉菩薩については、弥勒・文殊は法華經序品に於て問答した因縁があり、薬王・妙音・観音・普賢・は一品の大將であり、常精進・無尽意・普

賢もそれぞれ理由をあげているがこれらは所謂迹化の菩薩であり、本化の菩薩ではない。寿量品の久遠義や宝塔には関心が払われるが、地湧の菩薩には殆んど言及されない。法華曼荼羅には全く姿を見せない。

曼荼羅内院に四大声聞を配する。

即東北偶に摩訶迦葉・東南偶に須菩提・南西偶に舍利弗・西北偶に阿難（阿婆縛抄では目連）を配するがこれについて、第二院に菩薩が配されるのに声聞が何故内院四偶に居るのかという疑問に対して答えるのであるその答えを列記すると、

- (1) 四大声聞、中央の四偶に居すは四賢瓶の故に
- (2) 我等今日真の声聞、仏道の声を以って一切に聞かしめる。此の故に内に置く
- (3) 親しく身を以って生身の仏に随従して之を安ずるのは声聞であるから仏に近く内院に配する。
- (4) 華嚴・般若等の爾前の教では声聞は廃種の二乗と簡ばれたが、今法華の時に作仏の記別を受けたので、位已に仏に同ずる。故に仏に近く内院に置く。
- (5) 衆を列するのに三種の仕方がある。

(一)は声聞一菩薩一凡夫

(二)には、菩薩一声聞一凡夫（大より数える）

(三)には、凡夫一声聞一菩薩（小より数える）

以上の三種の列し方があるが、(二)、(三)でなく何故(一)の如く列するか。その答、声聞は心に智断を具し形は威儀を備えた比丘の姿であり、心形ともに勝れている。故に前に列する。

菩薩は心は道に会すと雖も形に定まれる方なく、或は道、或は俗である。則ち心勝形劣である。故に第二に列する。凡夫は心形両なが

ら劣である。故に第三に配する。

四大声聞を内院に配する理由を阿婆縛抄，覚禅鈔を併せながら述べたのである。

披見した書

覚禅鈔 覚禅（大日本仏教全書）

阿婆縛抄 承澄（大日本仏教全書）

法華曼荼羅威儀形色法經一卷 中京大興善寺大広智不空奉 詔訳（大正蔵 19，
密教部2）

成就妙法蓮華經王瑜伽觀智儀軌一卷 開府儀同三司特進試鴻臚卿肅国公食邑三
千戸賜紫贈司空諡大醫正号大広智大興善寺三蔵沙門不空奉詔訳（大正蔵 19，
密教部2）

本尊論資料（昭53. 2. 25. 新訂復制版）臨川書店刊

開目抄（昭定 日蓮聖人遺文第一卷）570頁に法華肝心真言を引く

金胎兩部真言解記 吉田恵弘著 平楽寺書店 昭45. 6. 20. 刊

法華經陀羅尼呪覚書 塚本啓祥著（法華經研究第4号所収，昭53. 3. 20. 立正
大学法華文化研究所刊）

梵字事典 中村瑞隆・石村喜英・三友健容編著 昭52. 4. 15. 雄山閣刊

曼荼羅乃研究 梶尾祥雲著 昭2. 8. 15. 刊

使用した辞書

Buddhist Hybrid samskrit grammar dictionary by F, Edgerton

a Sanskrit English Dictiouary by sir monier monier-Williams

The pratical Sanskrit-English Dictionary by V.S apte（臨川書店複製本）